

第4学年 総合的な学習の時間学習指導案

男子15名 女子12名 計27名

指導者 高木三智子

1 単元名 心をつなごう～チューリップ苑のお年よりとふれあおう～

2 単元の目標

- ・ チューリップ苑のお年よりについての理解を深め、お年よりと心をつなぐための自分の課題をもつ。
(課題設定の力)
- ・ 自分のこだわりやお年よりへの思いを大切にしながら、お年よりと心をつなぐための具体的な方法を考える。
(問題解決の力)
- ・ 自分の取り組みや交流活動を通して、思ったことを様々な方法でまとめ、自分なりに表現する。
(まとめて伝える力)
- ・ お年よりへの見方や考え方を深めたり、自分の思いの変容をとらえたりする。
(自分を振り返る力)

3 単元について

子供たちは、昨年度の総合的な学習の時間において、「東部の町の不思議」に目を向けて学習した。町の施設や商店、自然などについて抱いた疑問をもとに、「町の人が夢の森公園の親しんでいる遊具を知りたい」と公園を利用する人にインタビューをしたり、「点字ブロックや信号機の工夫を見つけたい」という自分の課題をもち、交差点に行って信号機の音を聞いたりするなど、自分なりの方法で課題追究していく学習を行った。その結果、子供たちは住みよい町になる工夫がされていることに気づき、町への愛着を深めることができた。しかし、インタビューや調べ活動における人とのかかわりは一方向的なものであり、相手を意識した双方向的な人とのかかわりを作り上げるまでには至らなかった。そこで、今年度の総合的な学習の時間のテーマを「心をつなごう」とし、校区にあるチューリップ苑のお年よりとの交流を中心とした活動を計画し、お年よりとふれ合うことによって、相手のことを考えて主体的に行動したり、相手と自分に対する見方を深めたりすることができる姿を願い、本単元を設定した。

本学級の子供のうち、祖父母と同居しているのは8人で全体の約1/3にすぎない。子供たちにとって、車椅子で移動したり、食事の介護を必要としたりするお年よりの様子を目にすることは、非日常的であり、驚きと戸惑いが大きいと予想される。そこで、活動前に、「チューリップ苑を知ろう」と呼びかけ、チューリップ苑の見学を行う。見学前には、訪問への意欲付けとなるよう「チューリップ苑のお年よりはあなたたちを待っている」ということを強調する。見学後の話し合いでは、お年よりの様子や建物の中の様子について思い出したり、職員やお年よりの方に「来るが楽しみにしとるよ」などと直接声をかけてもらい、お年よりと心をつなげたいという思いを高めたりすることができるだろう。また、子供たちは、お年よりと話をしたり、レクリエーションに参加したりするなど、直にふれ合う活動を繰り返すことによって、「私たちが歌を歌ったら、笑顔になってくれた」と自分が役立つ喜びを感じたり、「昔の話をたくさんして、教えてくれた」と心が温かくなる心地よさを感じたりすると思われる。活動を通して子供たちがお年よりの人柄や生き方に触れ、敬愛の情を深めていく姿を期待している。

本時では、「お年よりともっと心をつなげよう」と投げかけ、目前に迫る訪問活動でどのように取り組もうとしているのかを話し合うことを通して、一人一人のお年よりへの思いをかかわらせ、活動に寄せる自分自身のお年よりへの思いを見つめ直したり、友達のお年よりへの思いと活動の工夫を学んだりしながら、3回目の訪問への意欲を高めていきたい。子供が相互にかかわり合い、自分の思いや考えを語り合うことによって、一人一人の活動への意欲を高め、さらに主体的に活動できる子供を育てていきたい。

4 研究主題との関連

研究主題

自ら課題を見つけ、主体的に追究し、自分の生き方を考えていこうとする子供の育成を目指して

目指す子供の姿を意識し、願いや思いを膨らませるテーマの設定

「心をつなごう」という共通のテーマを設定することによって、子供たちの「お年よりに喜んでほしい」「お年よりと一緒に活動したい」という一人一人の願いをかかわらせながら、心をつなぐ相手に主体的にかかわろうとする姿を期待している。単元の導入では、「心をつなぐ」ことについてのイメージを話し合う時間を設定する。子供たちは、友達や家族と心がつながった時の体験を語りながら、「だれかと心をつなぐことは楽しいこと」と人とのかかわりに関心を広げるであろう。また、心をつなぐためには「自分」と「相手」が向き合うことが大切であると考え。心をつなぐ相手を家族や友達ではなく、年齢も身体的状況も異なるお年よりとすることは心をつなぐ難しさが増すであろう。しかし、活動を通して子供たちが自分の思いが伝わらないもどかしさや相手の気持ちが分からない戸惑いを感じる中で、相手をよく見て、「自分はどう動けばよいのか」「どんなふうに話しかけたらいいのか」などを考えさせ、主体的に行動していくように支援していきたい。子供たちの「心をつなぎたい」という願いの実現に向かって、一人一人が相手を意識し、主体的に活動に取り組むことができるように、対話やカードで見取り、「心をつなぐ」という捉えを深めさせながら学習を進めるようにしたい。

このように、目指す子供の姿を意識し、長期的な視野をもって思いや願いを膨らませるテーマを設定し、テーマに寄せる思いを共有していくことは、子供たちが互いの活動を振り返ったり、見つめたりする視点となり、チューリップ苑のお年よりとのふれあい活動に主体的に取り組んでいくものと思われる。

思いや願いを大切にしたい体験活動と「心をつなぐ」という視点を明確にした話し合いの場の持ち方

チューリップ苑への訪問を繰り返すことによって、お年よりに慣れ親しみ、お年よりとのかかわり方を自分なりに工夫していくことができると考え、月に1回計4回の訪問を計画する。また、希望者には夏季休業中も継続して行い、自主的に取り組むことができるように活動の機会を設ける。訪問の回数を重ねるごとに、「『さんに覚えとるよ』と言われて嬉しかった」「喜んでもらえたから、またおじいさんとしりとりをしたい」など、子供たちはお年よりへの親近感を抱いていこう。また、「今度は他のお年よりの方と話してみたい」と他のお年よりに目を向ける子供の姿も見られるだろう。子供たちが活動を通して、「次は絵を描いて喜んでほしい」などと活動への思いを膨らませたり、さらに「自分のできることはなんだろう」と考えを深めたりできるよう支援していきたい。このような体験活動を支える話し合いでは、「心をつなぐ」という視点で、活動を振り返ったり、見つめたりしながら、互いのよさや工夫について学び合う場となるよう工夫する。子供たちは、「さんは、お年よりの方に喜んでもらうために絵のプレゼントを準備している」とか「さんは、あいさつをしてもらったことが嬉しくて、心がつながったと感じている」などと友達のものの考え方や思いを知ることによって、さらに自分の考えを広げていくと考える。このように、体験活動を大切に、活動と活動の間に視点を明確にした話し合いを繰り返し設定することによって、自分の考えを深めたり、活動への思いを高めたりしていきたい。

心のつながりを見つめる評価カードの工夫

本単元では、訪問活動が中心となるが、その活動を繰り返す過程では、心のつながりについての個々の思いや願いを大切にしながら、学習を進めていきたい。その際、自分とお年よりとの間を「心の線」でつなぐという方法をカードに設けることによって、自らの取り組みを振り返ったり、相手の様子を見つめたりすることができるようにする。心の線は、「自分からたくさん話しかけることができた」「お年よりの『さんに覚えとったよ』と言われて、もっと嬉しくなった」と自分とお年よりの心の歩み寄りや線を太さや濃さ、長さで示している。また、これを全体の共通のものとすることによって、友達との共通点や相違点に気付きながら話し合うことができるように促していきたい。さらに、カードには文章の欄を設けることによって、お年よりへの思いの深まりだけでなく、活動中の気持ちの流れや言葉で言い表しにくい思いを表すことができるようにする。このことによって、教師は一人一人の子供たちの活動に寄せる思いを把握し、「お年よりからの線がだんだん太くなっているね」と心のつながりを感じている子供に共感した言葉かけをすることができる。また、評価カードを工夫することによって、子供たちが自らの取り組みを自己評価しながら、内面を見つめることができるように支援していきたい。